絶賛逃亡中！

福路朋子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
絶賛逃亡中！

【Ｎコード】
Ｎ７４５９Ｋ

【作者名】
福路朋子

【あらすじ】
瀕死の弟に手渡されたよく分からないチップは、どうやら世界を滅ぼしてしまう代物で、悪の組織から逃げるために、ひたすらの逃亡劇を興じる少年（職業・泥棒）のお話。バナナを踏んで転んじゃうくらいツイてない少年。
「何で俺がこんな目にいぃ！」

なんか悪の組織に追われちゃう。

なんでやねん。
思わずこぼれた言葉に、俺はまた泣きたくなった。
ほら、よくあるあれだよ。なんか大きな組織の秘密知っちゃって、
そのまま追われる身になっちゃう感じの。
ああいう感じになっちゃってんだけど。
ここで大いなる疑問だよ、こんチクショウめ！
何でこんなことになっちまったのかね！！ていう！

時は少々遡り。
「それはあんたがツイてないからだよ。」
店に来る途中にバナナを踏んで転んでしまった俺にあきれたように女店長は言った。
「否定する材料が一個も無いくらい正しい答えをアリガトウ、くそばばぁ。」
俺がそういうと、女店長はふん、と鼻で笑った。（本気であきれているようだ。）
「ほら、金はこれでいいね。」
「えー、もうちょっと色つけてくれよー。」
「それができるんならあたしはここに座ってないよ、糞餓鬼。」
あんたもね。と付け足された言葉に、俺は自嘲気味に笑った。

五年前からだ。盗みをはじめた。
理由は至極簡単。餓鬼にだって分かる。
生きるためだ。

両親が死んで、残された俺と弟が生き残るためには、そのぐらいしか選択の余地は無かった。
元々、ここは治安が悪い。
遠慮してたらあっという間に出し抜かれる。
出し抜かれるくらいなら、出し抜くことを俺は選んだ。
ただ、弟は馬鹿みたいにいい子ちゃんに育ってしまっていたため、俺が盗みをしていることは、秘密だ。
・・・違う。たぶん、知られたくないんだ。兄ちゃんの手が、こんなに汚れてるなんて。

家は銃撃戦の後のように荒らされていた。
「・・・、どう、なってんだ。誰が・・・」
「・・・っ！にい、ちゃん、」
後ろから声がした。振り返ると、ぼろぼろになった弟がいた。腹に大きな傷が開いていて、明らかに、致命傷であった。
弟は俺の腕の中に倒れこんだ。
「・・・！！どうした！、誰が、一体、何のために！！」
「・・・これ、」
「？・・・なんだ、これ。」
それは小さなチップだった。幅１ｃｍくらいの正方形。厚さは１？もない。
「にげ、て。・・・、はやっ！く！」
「おまえ、何言って・・・」

ぱぁん！

すぐ横を、何かが通り抜けた。
恐る恐る振り返ると、家の壁に銃弾らしきものがめり込んでいた。
「ハァイ。コンニチワ、ボーイ。」

再び前を向くと、カウガール風の帽子をかぶったナイスバディの金髪碧眼のねーちゃんに、二メートルを優に超えるタキシードを着た厳つい大男が立っていた。
「・・・ソレトモ、サヨナラの方がイイかな？」
「・・・。」
「あ、んたらか！！うちの弟をこんなにしたのは！」
「ウーン、正確二言うと、ウチの下のやつかなァ。マッタク、たかが餓鬼イッピキ捕まえられないなンて、アトデきつぅくオシオキしなくちゃ。」
「・・・殺さない程度に。」
「ココロえてるわよ、アイボー。」
二人が談笑（？）しているとき、弟が俺の服の裾をひいた。
「そ、れは、せかいをほろぼして、しまう・・・、もの、なんだ・・・。」
出血がひどい。分かってしまっていた。もう、こいつが助からないことに。「医者の息子」だから、知っている。もう、だめだ。
たぶん、弟も気づいている。自分が助からないことに。
「・・・、うん。」
「だから、にげて。」
「・・・それが、お前の望みなんだな。」
「・・・。うん。」
それなら、逃げる。どこまでだって逃げてやる。

「　　」

最後にそう言って、弟は死んだ。
泣いた。
「おやぁ？ソッチの子死んじゃったのォ？ツマンナイ。」
「・・・。」
「ん？泣いてる？ウフフ、かァわいー。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・、黙れよ。」

「ん？」

涙を拭った。

「黙れつってんだよ！！！くそばばばあ！ニセチチ！似非カウガール！！！！！」

大男の方が天を仰いだ。女の方は静かに銃の安全装置を外した。

かちゃ――――

「あんた、もういいわ。・・・死ね。」

訛り言葉が抜けた。

フン、上等だ。

俺は隠し持っていた手榴弾の栓を抜いた。

どかああぁぁぁん！！！

「ハァ！？手榴弾！？こんなもの一体どこで！！」

とある一角にある換金屋のババァから頂きました。

煙に乗じて気配を消す。泥棒だから気配を消すのは得意だ。

・・・、そして。弟はそっと地面に置いた。

「・・・・・・じゃ、ちょっくら逃げてくる。」

最後の最後に、笑って逝った、弟の望みを叶えるために。

なんか悪の組織に追われちゃう。（後書き）

もうひとつの作品との両立を頑張ります。・・・ほどほどに。

五月五日。微妙に加筆修正。

しーくれっと・ばばぁ？

「ババァ！」
店のドアを乱暴に開くと、カウンターで本を読んでいた女店長は迷惑そうに耳を押さえた。
「なんだい、騒々しい。今日の取引は終わったろうが。・・・！」
「さっき貰った金で銃と、煙幕と、あ！あと食料くれ！保存が利くやつ！」
「・・・ふむ？・・・くくく。どうやら面白おかしいことに巻き込まれてるね。」
そういって俺のいでだちをじろじろと見るので、俺も視線を自分の身体に下ろす。
ババァの言うとおり、弟の返り血やら泥やらで結構ひどい有様になってしまっていた。
「出血大サービスだ。これ全部やるよ。」
カウンターの下の棚から出るわ、出るわ。
ピストル一丁に、替え玉三ピース、小型煙幕十個に、チーズに乾パン・・・etc
「・・・、あんた、ナニモン？」
「ただのクソババァ。」
即答だった。ただ、目は恐ろしいほどぎらついていて、百パーセント嘘であることが分かったが、これ以上は聞かないほうが身のためだと本能が俺に訴えかけた。
「カネはいらない。せいぜい生き残ってきな。」
「・・・、うん！」
俺はしょっていた鞄にそれらを手早く詰める。（こういう時に泥棒の手際のよさに感謝する。）
「それと、その胸ポケットに突っ込んでるチップ。」
「！」

「大丈夫、盗ったりなんかするもんか。・・・気をつけなよ。それ、変にいじると大爆発起こすから。」
「！！！」
何でそんなこと知ってんだ、とか、いろいろ思ったけど、チップを胸ポケットから慎重に取り出して、鞄の貴重品入れに仕舞う。
「・・・、了解。」
「じゃあね。」
女店長はひらひらと手を振った。
「うん、ありがとう！」

「あーあ。ついに始まったか。・・・だとしたらここにいるのがばれんのも時間の問題かな・・・。」
あたしは引き際を悟る。
「さて、あいつ、逃げ切れるかな。」
いくつか援助はしたが、アイツ等から逃げるのは骨が折れるだろう。
あたしはカウンターの下から大きなトランクを引っ張り出して、必要なものを詰め込む。
「結構気に入ってたのになぁ、この町。」
四十五口径の大型銃二丁を腰のベルトに引っ掛ける。

変装用のマスクを剥がす。

まだ二十代程度の顔があらわれる。こっちがあたしの本当の姿だったりして。
手鏡で乱れた髪を整えてひとつに束ねる。
「うーん、若い。久しぶりに自分の顔見たね。」
愛用の帽子を目深に被り、
「ほいじゃま、トンズラしますか！」

「・・・ん？にしてもアイツ、どこであんなモン手に入れたんだろう？」

しーくれっと・ばばぁ？（後書き）

主人公の名前が出てないことに気づいてしまった今日この頃。・・・

まあいっか。

せまりくる、・・・えーと、悪の手？

「うわあああああああああぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！」

パン、パン、ガガガガガガガガガ！！！！！

死ぬ、死ぬ！死んでしまう！

後ろからの銃弾のオンパレードから必死に逃げてます。イエーイ！

・・・、うん、ごめん。だからそんな冷たい目で俺を見ないで。

手近な壁に隠れて、腰に差したピストルを抜く。もちろん射撃なんてやったことはないが、きっと何とかなる！小説ならではのご都合主義に期待する！

ピストルを撃った！！

ぱすん。

「・・・・・・・、はい？」

ピストルの先からは「世の中そんなに甘くない★」と書かれた、紙、が・・・・・・・・・・。

「あンのババァァァァァァァァァァァァァァァ！！！！！！！！！！」

死と隣り合わせの追いかけっこ、再開。

・・・ご都合主義はどこに行った！！ばかやろうめ！

「あ、やっべ、アイツに渡したのダミーだった・・・。・・・・・・・・、まぁいっか。それはそれで面白そうだし。」

「・・・、で？逃げられたって言うの？」
「スス、すみません！」
「・・・アリア、怒るな。」
「うっさいわよ、デカブツ。アタシはコイツと話してんの。」
カウガール風の格好をした女は二メートルを超える大男に不機嫌そうにいった。
「・・・・。」
「ん？まだオシオキが足らないのか？ん？どうなの？」
「ももも、申し訳ありあせんん！！！」
黒ずくめの男は深々と頭を下げた。「オシオキ」という言葉に反応していたから、相当なものなのだろう。
「・・・これ以上の失態は許されない。アタシ達もあのボーイを捕まえに行くわよ。」
「・・・・。」

一旦、撤きました。これからが腕の見せ所です。

「ふぅ・・・。撤いたか。」
逃げることなら泥棒業で慣れている。
今のうちにどっかで銃でも買うか。（ババァのせいで余計な出費だ・・・。まあ、感謝してるけどさ。）

どん！肩がぶつかる。

「いった！ちょっと、気をつけて歩きなさいよ！」
同い年くらいの女が俺に噛み付いた。
「スマン、スマン。」
俺ケタケタと笑ってから、ぐいっと女の腕をつかんだ。その手にはすごく見覚えのある財布が握られていた。
「・・・ところで、コイツは誰の財布かな？」
「・・・っだ、誰のかしらぁ？」
女は気まずそうにあさっての方向を仰いだ。
「たく、あんまり華麗に掏るから危うく見逃すところだったぜ。相手が悪かったな、腕はよかったぜ、ネーチャン。」
そう言って俺は財布を奪い返して、その場から立ち去る。
「ま、待って！・・・、警察には、言わないの？」
「・・・おれ、いいやつだから。なーんちゃって。」
「・・・・・・。」
正確に言うと泥棒だから行きたくないだけだ。（まだ顔はばれてねぇけど。）

しばらくして、あの女の悔しそうな叫び声が聞こえた。
「悪いね。・・・でも、先にやったのはそっちだろ？」

女物の財布をもてあそび、俺は笑いをかみ殺した。

一旦、撤きました。これからが腕の見せ所です。（後書き）

短くてすみません。
次はもうちょっとがんばります。

ちなみに主人公はわざと掏られました。そっちの方が掏りやすくなるから。
・・・ワルですねー。

ヒロインらしき方が登場しちゃった。

女を撒いたのを確認して、今度は金銭の確認のために路地裏に入る。
女の財布は予想通りというか、やっぱりショボかった。・・・まぁ、スリやるくらいだもんなぁ、お金が余ってるわけないか。（別の奴にすればよかっ・・・こほん。）
これじゃ足しにもならない。・・・が。
盗った物を返すのはなんか癪だ。骨折り損のくたびれもうけなんてマジで嫌だ。（泥棒の美学（？）というヤツだ）
ということで中身を失敬。
俺の財布の中に、女の財布に入っていた金を移す。
「証拠隠滅。」
路地裏に置かれていたぼろぼろのゴミ箱の中に空になった財布を捨てようとしたとき。

「待って！」

先ほどの女だった。
おかしい、路地やら人ン家の屋根やらを跨いで完璧に撒いたはずなのに。（しかも、スリをした場所は人通りが多く、条件も良かった。・・・あ、いや、別に最初から掏ろうと思ってたわけじゃ・・・・・・、すみません、その通りです。）
「・・・っお金は、もう返さなくていいから！それ、返して、お願い！」
それ、とは、この財布のことだろうか。
捨てようとしたそれをまじまじと品定めする。・・・、が、やはりどこからどうみてもただの少し古い財布だ。（泥棒なので、目利きには結構自身がある。）
「ただの財布なのに、何でそんなに返して欲しいの？これ売るより、

金取り返した方が、まだマシだろ。」
「う・・・、アンタには関係ないでしょ・・・。」
女は嫌そうに顔を歪めたが、俺が一向に返そうとしないため、ため息をしてから、言った。
「・・・、それ、死んだ母さんに買ってもらったものなの。」
なるほど。こいつも恐らく失ったのだ。あの「戦争」で、家族を。
俺の場合、首にかけているペンダント以外は親の遺品も全部売り払ってしまったが。ちなみにペンダントを売らなかったのはロクな値段にならなかったからである。（生き残るのも厳しい時代に、装飾品は金持ちのボンボンどもくらいにしか売れない。しかし装飾品としてはシンプルなこいつを買い取ってくれる金持ちは、いなかった。）
弟は売り渋っていたが、「生きるためだ。天国にいる父さんと母さんも許してくれる。」とか何とか言って適当に言いくるめた記憶がある。（・・・てんごくなんて、ない。）
「ん。」
俺が財布を女に突き出すと（どうせ金にならないし）、女の顔はさっきまでが嘘みたいに輝いて、かと思ったらすごい力で財布をひったくった。
「にしても、よく追いついてきたな。うまく撒いたって思ってたんだけど。」
「フン！わたしが何年この町に住んでると思うの？相手が逃げそうな場所くらいおさえてあるわよ！」
「なるほど、もしスリがばれた時の逃げ場所確保してんのか。俺も今後のために参考にしとこう。」
「・・・、あんた、やりづらい。」
「どーも。」
泥棒からしたら立派なほめ言葉だ。
にしても・・・、そうか。この辺見たことないと思ってたけど違う町（エリア）にきてたんだな。

逃げるのに必死で気づかなかった。
「・・・、ね、ねえ。」
女は何故かしどろもどろになりつつ、言った。
「・・、な、名前、なんていうの？・・・・、あ！変な意味じゃなくって！・・・・、さ、財布、返してくれたりしたし。」
それは単に金にならないからだ。・・・という失言は勿論しない。
「あー・・・・、じゃあ、ジャンで。」
「・・・『じゃあ』って、なに？」
「俺、本名嫌いなんだよ。女っぽい名前でさ。」
うむ、今日、このときから俺はジャンだ。おお、結構カッコよくない？
「・・・じゃあ、もうそれでいいや。・・・ありがとう、ジャン。」
女はあきれたように笑った。
「・・・お？」
「・・・・、なに？」
「いまさらだけど、お前、結構カワイイな。」
殴られた。
「ば、ばばっ、バッカじゃないの！！お、女の子にそういうこと気安く言わないでよね！」
むう、本音言っただけなのに。女心って良く分からん。

「その通りよ、ボーイ。」
ものすごく聞きたくない聞き覚えのある声が後ろからした。
「・・・っ！」
ああ、くそ、見つかンの早すぎねぇか！？
「女を口説くなら、もうちょっと駆け引きヲ覚えなくチャ、ネ？」
金髪似非カウガールは不敵な笑みを浮かべた。

ヒロインらしき方が登場しちゃった。（後書き）

ちなみにどんな話でもほとんどはそうなんですけど、世界観設定は大体ほっとく主義（？）です。
必要最低限決しか決めてません。
理由はそのあやふや感を自分で想像するのが楽しいからです。（皆さんも楽しんで・・・・ください？）
この話は多分異世界でしょうね。でも地球の〇年後というのもありかもしれない。

ということで本当の真相は皆さんの手に。

・・・ちなみにスリの女の子はツンデレです。（超どうでもいい）

世の中そんなに甘くない★

囲まれている。
路地裏なのがいけなかった。前後を固めてしまえば、逃げ場はない。
「ジャ、ジャン・・・これ、なに？」
不安そうに女が聞いてくる。声は気のせいか少しだけ震えていた。
「悪の組織の秘密を握っちゃって追われている美少年の図。」
冗談めかしていうと、似非カウガールは言った。
「大体その通りだけど、アタシたちは悪の組織じゃないし、アンタは美とはいえないね。」
「うっせ。」
「冗談はともかく、返してもらおうカ。ソレはアンタの手に余る代物ダ。」
「やだぴょん。」
「・・・相変わらずクソボーイだね。」
「自覚はあるよ。直す気はねぇけど。」
さて、どうしたもんか。逃げ場固められてちゃ煙幕も意味ないだろうし。
俺は腰に差していたピストルを抜いて、似非カウガールに向けた。
「！・・・くっくっく、知ってるよ、それ、玩具だロ？」
「ああ、そうさ。確かに逃げてるときに使ったのは、な。ただしコイツはホンモノだ。さっき店で買ったばかりだからな！」
「！！・・・っな！？」
似非カウガールの顔が驚愕の色に染まる。似非カウガールはまだ銃を抜いていなかった。
「勝手に動けば、撃つ。」
「・・・クソボーイ」
似非カウガールは吐き捨てた。
「俺の条件はコイツを逃がすこと。」

「・・・、ジャン・・・。」
「・・・だが、それはお互いコマルだろォが。」
「コイツはスリだから警察にも行けない。問題ない。」
「・・・フン。」
「お前は、こっちに来い。近くにいないと人質の意味がねぇ。」
「・・・ゴモットモ。」
似非カウガールは大人しく両手を上げて俺の隣に立った。俺はそいつの米神にピストルを突きつけた。
「行け。こいつらの気がかわんねぇうちに」
「でも、でも。」
「行けって。お前は関係ないんだ。」
そういうと、女は目を伏せた。
「・・・。うん、分かった。」
女は一度だけ振り返ると、そのまま走り去った。・・・そういや、名前、聞いてなかったな。
「・・・、で？アンタはほんとにあたしが殺せるのかイ？」
からかうように似非カウガールは言った。
「ナメんなよ。生きるためならなんだってやる。盗みも・・・殺しもな。」
「・・・ふぅん、アンタ、ケッコーイイ男になるかもネ。」
「ふん。」
「・・・アノ子、本当に警察行かないのかイ？」
「いかねえな。俺も警察来たら困るし。」
「――――――・・・ナルホド。」
と、言った瞬間、似非カウガールは動いた。
すばらしい速さで俺の銃を奪いにきた、が。

勿論、予測の範囲内だ。（じゃなかったら俺はひとつも動けなかった。・・・断言する！）

似非カウガールが銃を奪ったと同時に、俺も、似非カウガールの腰に差さっていた銃を奪った！

お互い、同時に相手にピストルを向けた。
「・・・フン、とっさの判断にシチャ、上出来ダ。」
俺はピストルの安全装置を外した。
「早撃ち勝負といこうか。」
俺がにやりと笑ってみせると、似非カウガールも不敵に笑った。

ぱすん。

「・・・ハ？」
似非カウガールが間の抜けた顔で、間の抜けた声を出した。
「ギャーーーーーーーーーーーーハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハ！！！！！！ひっかかってやんのおぉぉぉぉ！！！」
「ま、マサカ・・・。」
『世の中そんなに甘くない★』と、銃から飛び出した紙を見て、似非カウガールはわなわなと震えた。
「その通り！それはあんたが最初言ってた通り偽物（オモチャ）！本物の銃はこ

れから買いに行くとこだったんだよ！」
俺って、役者の才能あるかも。
「ン、のぉ、ガキィィィィ！！！！！」
「迫真の演技だったろ？内心いつばれるか心臓破裂しそうだったぜ。」
ほんと、慣れないことはするもんじゃないな。
似非カウガールは偽物（オモチャ）を投げ捨てた。
「・・・ッ、オチ、ツケ、アタシ、ノ、ニンム、ハ・・・・・・！」
キテる。だいぶキテるな。さて、一気に攻めるとするか。
「かまう事なんて、ねぇ・・・」
似非カウガールがつぶやいた。
俺はそのとき、こわいとおもった。
何がって、この女の眼だ。
「アタシ一人の命でチップが手に入るなら、構うことなんかねぇ！
コイツを捕まえろ！！」
「な、なにいィィィィ！？！？」
予想外過ぎる展開！！

いまとむかし（前書き）

アリアさんの視点

いまとむかし

人間として生きることを許されたのは、１５年前のことだ。
そのときまで、アタシは、正しい意味で生きていなかった。

「君達は、自由だ。」

１５年も、昔のことだ。

その人は、アタシを含めた『施設』の子どもたち全員を、『買って』くれた。
その人は、アタシ達に名前をくれた。あたたかいご飯をくれた。やわらかい布団をくれた。
勉強を教えてくれたし、ちょっとだけだけど、お小遣いもくれた。
アタシ達は、その人にお礼を言った。
自分達はいま、しあわせだ。ありがとう。だいすき。

そう言うと、何故だかその人は悲しそうに笑うんだ。

「ひとつだけ、僕の願いを聞いて欲しいんだ。」

・・・もちろん聞こう。だって、大切な人の望みは、叶えてあげるものでしょう？

「そんなこと、できない！」
同じ『施設』で育ったファイが叫んだ。
ばかやろう、誰にそんな口聞いてんだ、今度ぼこぼこにしてやる。
銃をあたしに突きつけている、クソガキもうろたえたように言葉を続けた。
「そ、そーだぞ、バカヤロー！！アンタ幹部かなんかだろぉ！命は大切に！！！」
「・・・銃突きつけてるヤツが言うセリフ？」
「サーセン・・・」
クソガキは気まずそうに目を少し逸らした、が、突きつけている腕を下ろす気配はない。
というか、先ほどのクソガキの言葉には、勘違いしている部分があった。あえて訂正してやるほど親切でもないし、その方が都合がいいから黙っていたが、アタシは別に幹部じゃない。更に言えば下っ端もいいところだ。
この格好は分かりやすい『キャラ付け』というヤツだ。
新しい構成員が入ってきたとき、司令官であるアタシを見つけ易くするための、衣装だ。
それに、この格好の方が、銃の命中率、上がるような気がするんだよね。するだけかもしれないけど、そういうわかり易い暗示って結構必要なのだ。

「そうですよ、命は大事に・・・、ね、アリア。」
「！」

その声は、アタシが今一番聞きたくなかった、大切な人の声だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7459k/

絶賛逃亡中！

2010年10月10日01時25分発行